日本医史学雑誌第四十一巻第三号　平成七年二月二十四日受付
平成七年九月二十日発行　平成七年三月三十日受理

『紅毛医術聞書』にみる合田大介のカンケル論

長与健夫

はじめに

合田大介は宝暦十二年（一七六二年）に『紅毛医言』と題してわが国ではじめて蘭方の内科を紹介した合田求吾の弟である。兄求吾の名声にかくれてその功績は医学史上では余り知られていないが、縁あって大介の子孫に当られる丸亀在住の合田慶助氏宅に蔵されている同家の古い資料十数部を見せていただく機会に恵まれ、その中には大介の筆になる蘭方医療、とくに外科に関する手書きの草稿がいくつかあり、その内容が時代を抜くものであるのに驚嘆した。

とくにそのうちの『紅毛医術聞書』と題する和綴八十余ページの書には江戸中期の蘭方勃興期にもその様子が全く知られていなかった癌（カンケル）についての記述があるので、それを中心にしてこの書の内容の概略を紹介したい。

大介の略歴

合田大介（俗称は大助、諱は善与、字は久敬、号は蘭斉）は元文三年（一七三八年）讃岐の和田浜（現在の香川県、丸亀）で代々医を業とする合田吉盤（伝右ェ門）、鞠の三男として誕生した。長兄の求吾が享保八年（一七二三年）生れであるので、求吾とは十五歳違いの弟ということになる。

幼いころから親孝行、兄思いの利発な少年であったようであるが、十八歳の宝暦五年（一七五五年）兄求吾の薦めで長崎に行き、和蘭大通詞で医業にも通じていた吉雄耕牛及びその弟の芦風（永純・作次郎）について蘭方の手習いを受け、当時オランダで使われていた薬の名称、内容や効能を「紅毛口和解」、「阿蘭陀薬種効能之伝書」などとして書きとめた。二年余りで家に帰ったが、求吾は未だその学習が充分でないとしてその後数回大介を長崎に送り出して勉学を続けさせた。

宝暦十一年（一七六一年）から二年間京都に出て古方家の松原敬輔（一閑斉）に師事しており、求吾が長崎に行き吉雄耕牛、芦風についてオランダ内科を学びそれを「紅毛医言」と題して著したのが宝暦十二年（一七六二年）であるので、その時大介は京都に居たことになる。

長崎で学んだオランダの外科術や薬の知識を基にした彼の治療は他に比肩するものが無かったので、別に一家を興した家には遠近を問わず患者が殺到し、彼の名は関西以西に広まったという。

大介が四十歳の安永六年（一七七七年）の春に師の芦風から便りがあり、「最近オランダの医書を入手したが、私は病気でその訳が出来ない。誰にこの書を伝えるべきか門弟に相談したところあなた以外にはないという一致した意見なので、是非長崎に来て欲しい」との内容であったが、その頃大介は重病人を抱えて診療に忙しく長崎に行くことが出来なかった。その年の秋芦風は死去し翌年その霊を慰めるために彼は久しぶりに弟子の西村正佐を連れて長崎に行き、芦風が彼に託した蘭書を受け取りそれを長崎の客舎で正佐とともに訳して『外療和解雑記』（安永七年・一七七八年）と題して記録した。晩年は病を得て一時静養し、寛政七年（一七九五年）五十八歳で死去した。

「紅毛医術聞書」の内容

この聞書と前後して書かれたと思われる『紅毛外科聞書』とともに、この『紅毛医術聞書』が書かれた年代はその巻

頭にも巻末にも記載されていないので確かめることは出来ないが、聞書とある題言とその内容及び前記した大介の略歴とから『外療和解雑記』の書かれた安永七年（一七七八年）以前のものであることは間違いあるまい。

聞書の性質上いろいろな疾患の順序立った記述とは云い難く、随分と重複したり前後したりする所があるが、この書の主体をなすのは腫瘍論とも云うべきものである。（『紅毛外科聞書』には、炎症や水腫などによる〝腫れ物〟や痔核、痔瘻などのことが記されており、当時のこの領域のことを知るのに興味があるが、主題を離れるので省略する。）

未だ良性―、悪性腫瘍の概念が確立されておらず、まして上皮性、非上皮性の別などは思いもよらぬ時代であったので、その記述には多少の混同や間違いまた意味不明な所もあるが、その内容を検討してみると腫瘍には良性のものと悪性のものとがあることは認識されていたようである。またその対象が主として乳房や陰茎など外部から判断出来るものに限られているは、病理解剖の普及していなかったこの時代のことを思えば当然と云えるだろう。

カンケルについて

カンケルについては以下のように記載されている。

カルシノマ　一名　カンケル

此腫（シュリス?）ニ似テ不散、不膿、行（い）スワリテ不動。而（して）悪症ヲアラワシ痛出、此ヲカンケル初発ト云。筋蟹ノ脚ノ如クシテ痛甚強者也。此腫終リニ口明ク（潰瘍化）モアリ又口明ザルモノモアリ。初発シュリスノ如クコハリ（しこる）、腫ハ細ク乾梅ノ如クシテ、年月ヲ経テ次第ニ増脹スルモノ也。……口傷（くず）ルルコト二年・三年カカルモ有。又一年位ニテ傷ルルモ有。口傷レテハ黄汁出、臭気甚シク　痛ミ弥々（いよいよ）相増シ、夫ヨリ色々ノ悪症ヲアラワスモノナリ。

出所婦人　乳ニ多アリ。又男子乳ニモ出。或唇、咽、舌、鼻、男女ノ陰所ヘモ出ルモノ也。人年四十ヨリ余ノ男女

ニアリ。婦人無子ノ者ニヨク発ス。又経水不来人ニモ儘（まま）有。年四・五十ノ婦人ニ有。

註云　カンケル婦乳、胸膈ニ多発ス。生気血不順ノ人　又虚弱ノ人、出ル処何レヘ出テモ難腫ナリ。……初メ梅核ノ如クアル也。切リ取ルコトヲ良トス。

カンケル初発ハカユミアリ。微熱シキリキリト痛ミ、亦赤色、灰色、又ハ紫黒色、時トシテ変色ヲナス。体重ウスクナリテ根フカキモノ也。口傷レテハ甚ムツカシキモノナレバ初発ノ内ニ治ヲ為（な）スコトヲイソグ也。口傷レテモ必死ト云ハナシ。折々ニ治スルモノアレバ、気ヲ付テ治ヲナスベキコト也。

カンケル口傷レズ痛モナク　病人タシカニシテ気分ニモサハラズ治モマチガワネバ　タトイ久シクナルトモ治スルモノ也。……医者タル者病家ヨリ礼ハウケルナレドモ、一人モ今時分此ノカンケルヲ治スル者ハアルマイ也。……切タルアト痛出ルハ難事ナリ。

カンケル出ル処女子子宮、口中、両腋、両股ナドヘ発スルハ難キ也。唇、目、乳、是ナドヘ出シハ科治イタシ易キ也。此ホドノ処ハ切テ治ヲナシヤスシ。子宮、口中、腋下ナドハ切取ルコトナラヌユエニ治シガタキ也。

カンケルウツルト云ケレドモ、ウツリタルハ此マデ見ヌ也。治シタルモノハ毎度見タケレドモ何モナク年ヲ経シトナリ。……止ムコトヲエズシテ切取テ全快シ年久シク生キタル人モ十人ノ内三人モアレリトナリ。……痛強キハ阿片ヲ煎湯ニ加入シ飲スル也。又芥子類モヨキ也。病人強弱ヲ考ルコト第一ナリ。阿片ヲ用フレバヨク眠ルモノ也。……

上述したように大介は乳房に出来たカンケルは早いうちに切り取れば治る病気であると言っている。またこの文の中には良性腫瘍が含まれていた可能性も否定出来ない。

カンケル論の影響

山脇東洋に教えを受け江戸医学史上の奇才と云われた永富独嘯庵は、合田求吾とほぼ同時期の長崎行きを基にして書

いた『漫遊雑記』の中で　次のようなことを言っている。

「乳癌ノ治セザルハ古クヨリ然リ。然ルニ和蘭書中ニ言エルコトアリ。曰クソノ初発梅核ノ如クナル時快刀ヲ以テ之ヲ割キ、ノチニ金瘡ノ法ニ従ツテコレヲ治スルト。コノ言味アリ。余未ダコレヲ試ミヌト雖モ書ヲ以テ後人ニ告グ。」と。

独嘯庵は蘭書が読めなかったので、この文章は彼が合田求吾から直接に聞いたか、求吾の『紅毛医言』か或いはその弟の合田大介の著した『紅毛医術聞書』の記述を見て、それを引用したものと思はれる。華岡青洲が文化二年（一八〇五年）に　二十余年の歳月をかけて苦心惨憺して作り上げた全身麻酔剤（通仙散）による乳癌の手術切除に成功したことは余りにも有名であるが、乳癌もその初めには梅の実のようなしこりで、この時期に切り取れば患者を助けることが出来ることを知っていたからこそ手術に踏み切ったのであろう。青洲はこのことを大介か独嘯庵の記述によって知ったに違いない。大介の著した『紅毛医術聞書』のうちのカンケルに関する記載は、当初はただカンケルの性状を語り姑息的な治療法を伝えるに過ぎなかったが、後になってこのような大きな力を発揮する原動力となった。事実に即した正しい情報を伝えることの重大さがここにも覗われる。

フランス・アカデミーの大家ペティーが乳癌の根治手術を提唱して、それが認められたのが一七七四年であったとされているので、乳癌手術についての情報は蘭書を通じて大介や独嘯庵に比較的早く伝えられたとみてよいであろう。

おわりに

合田大介は吉雄芦風に私淑していた。このことは大介のご子孫であり丸亀に住んでおられる合田慶助氏宅の仏壇に、同家の祖先の位牌とともに芦風の位牌が安置されていることからも知られる。

大介はオランダ内科をはじめてわが国に紹介した『紅毛医言』の著者合田求吾の弟であり、芦風はオランダ通詞の巨匠で蘭方紹介の総元締めとも云うべき吉雄耕牛の弟である。讃岐と長崎という遠隔の地に住む人達でありながら、年齢

の似かよった兄弟同志が新しい医学・医療の導入のために互いに深く信頼しあって知識と情報を交換しあい一つの時代を切り拓いていったことに感動を覚えるが、それにも増して癌という病気が昔から洋の東西を問わず人類共通の敵であったことを改めて思い知らされた。

（付記・吉雄耕作・芦風兄弟が使った原書が何であったのか記載が無いので明らかでないが、その時代の輸入蘭書のリストからしてハイステル著、ウルホーン蘭訳の外科書及びプレンキの外科書などが用いられていたものと思われる。）

謝　辞

貴重な資料を快くご提供いただいた合田慶助氏に深甚な謝意を捧げる。また同家に所蔵されている数多くの貴重な資料の整理には慶助氏の父君故貞五郎氏の並々ならぬご努力があったことを付記する。）

参考文献

紅毛医術聞書（年　不明）
紅毛外科聞書（年　不明）
紅毛口和解（宝暦五年―七年）
阿蘭陀薬種効能之伝書（宝暦八年）
紅毛外療聞書改録（宝暦十一年）
口中伝書（明和五年）
外療和解雑記（安永七年）
以上、合田大介 述
蘭斉先生行状（合田 習〔大介長男〕述、寛政八年）
独嘯庵先生行状（亀井南溟 述、明和三年）

合田求吾兄弟の伝記資料について（山本四郎　記）

以上、合田家所蔵

（1）富士川游「温恭合田求吾先生」中外医事新報、一二三九号、一―九頁、一九三六（昭十一）
（2）大久保甚一「讃岐の名医合田強先生と最初の蘭方内科書『紅毛医言』」東北帝大、艮陵、三五号、一九三六（昭十一）
（3）草薙武吉「讃岐蘭学の先駆者、合田強の『紅毛医言』に就て」香川県学友会雑誌、一九三六（昭十一）
（4）竹内乕夫「蘭方内科の先駆者、合田求吾」坂出文化協会、海橋、九、一九八三（昭五八）
（5）岡田唯吉「讃岐の四大医について」鎌田共済会、郷土博物館蔵
（6）長与健夫「合田求吾の『紅毛医言』について」日本医史学雑誌、三八巻三号、八九―一〇〇頁、一九九二（平四）

（愛知県がんセンター名誉総長）

Treatise on *Kankeru* (Cancer) Written in the Book "Komo Ijutsu Monsho" by Goda Daisuke

by Takeo NAGAYO

"Komo Ijutsu Monsho" (Book on Dutch Style Medicine) was written by Goda Daisuke (1738-1795), who was a physician in Sanuki (Kagawa Prefecture) and younger brother of the author of "Komo Igen" (Introductory Note on Dutch Internal Medicine) Goda Kyugo, by listening to the Japanese interpreters Yoshio Kogyu and Rofu of Nagasaki, around the 1760's.

In this book, he noted the nature of *Kankeru* (cancer), especially of the breast, and also referred to the fact that the disease is curable when it was removed in its early stage.

Later on, this information led to the success of surgical resection of breast cancer by Hanaoka Seishu in 1805 by the use of general anesthesia, which he invented.

This article introduces the pioneering work of Goda Daisuke.